



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高橋優子『ポップカルチャーを哲学するー福音の文脈化に向けてー』（新教出版社、二〇一七年）
Author(s)	宮嶋，俊一
Citation	基督教學， 53， 35-37
Issue Date	2018-07-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75523
Type	journal article
File Information	05miyajima.pdf



高橋優子『ポップカルチャーを哲学する ―福音の文脈化に向けて―』

(新教出版社、二〇一七年)

宮 嶋 俊 一

本書は、サブカルチャー(著者は、この語に代えて「ポップカルチャー」の語を用いているが、人口に膾炙しているという点を鑑み、本稿では「サブカルチャー」の語も併用することとする)に表象された宗教(とりわけキリスト教)に関する著作である。サブカルチャー作品の紹介書であると同時に、そうした作品に対する著者独自の視点からの分析も加えられている。

同様の企画、すなわち、「サブカルチャーに見られる宗教性」について論じた書物は、これまでも存在してきた。例えば、映画に表象された宗教ということであれば、井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』(二〇〇九年、

弘文堂)がある。また、マンガであれば、渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本2015 マンガと宗教』(二〇一五年、平凡社)がある。さらに、キリスト教や仏教など、特定の宗教的立場から書かれた書籍として、栗林輝夫『シネマで読む新約聖書』(二〇〇五年、日本キリスト教団出版局)、および『シネマで読む旧約聖書』(二〇〇三年、日本キリスト教団出版局)や、釈徹宗・秋田光彦『仏教シネマ(お坊さんが読み説く映画の中の生老病死)』(二〇一一年、文藝春秋社)がある。本書も、こうした出版の流れに倣さすものであると言えるだろう。だが、あえて本書の特徴を挙げるとすれば、メディアミックス作品が多く取り上げられていることではないだろうか。筆者自身、「複数のメディアで展開されるほど人気のある作品だけを対象とした」と述べている。その言葉通り、本書で扱われる作品は、マンガ、ドラマ、映画など多様なジャンルへと展開しているものばかりだ。ある作品をコミックとして、ライトノベルとして、また映画として、テレビアニメとして、それぞれ取り上げることできるし、メディア研究としてはどのような媒体

でそうした作品が紹介されたかが重要であることは間違いない。だが、むしろ本書ではそうした違いにはあえてこだわらず、煩瑣な議論を避けることで、本書全体のねらいを明確化するということが意図されているのかもしれない。

そのねらいとは、「キリスト教を現代日本文化に文脈化^{インカルチュレーション}することである。筆者によれば、日本

でキリスト教というと、ヨーロッパ的な「正しいキリスト教」のセットがあるかのような固定観念があり、その結果、日本のキリスト教は「成長する前に化石化している観がある」。そうした状況に一石を投じたいというのが、本書における筆者のねらいである。

その際重要となるのは、「文脈化^{インカルチュレーション}」される対象となる「日本文化」の特徴であるが、筆者によれば、その日本文化の中にはすでにサブカルチャーを介して、キリスト教的・あるいは宗教的なモチーフが存在している。筆者はそれを、次のように表現している。「日本において、たとえキリスト教徒が少数派であるにせよ、その文化的影響力は小さくない。実は、日常的に接しているサブカルチャー作品の中にもキリスト教的なモチーフは数

多く存在しており、そのことに無自覚なだけだ」と。そして、そのことに自覚的であれば、「文脈化^{インカルチュレーション}」も、より自然に行われていくのではないか、ということなのだろう。

本書の成立過程は、そうした筆者の思いとも深く結びついている。「あとがき」によれば、著者が担当した大学での授業が、本書の成立に大きく関わっている。著者は学生たちから新しい情報を得、他方、授業でその作品の分析を行う。この循環の中で、本書が生まれた。それゆえに、著者は本書が教育現場においても役立つであろうことを望んでいる。筆者の言葉を引けば、「キリスト教徒が極端な少数派であるこの国でキリスト教を教えるという困難な仕事に真摯に取り組んでいる先生方の役に立つとしたら、この数年間の筆者なりの努力……に意味を認めることができるように思う」ということだ。

さて、扱われる作品の年代であるが、やや古い作品としては、一九八二年から連載が開始され、八四年に映画化された『風の谷のナウシカ』、八三年連載開始の『死神くん』などがあり、他方では現在進行形で連載、放映

が続いている作品も紹介されている。よって、八〇年代から現代までの作品ということになる。言うまでもなく、それだけの時代のサブカルチャー作品のすべてを網羅的に取り上げていくことなど不可能であるし、選択が働くことは当然である。筆者は「人気のある作品」と述べているが、宮崎アニメのように老若男女に親しまれている作品もあれば、主に若者に支持されていると思える作品もあり、その選択の仕方が恣意的に感じられる面もある。その理由のひとつは、二年間にわたる雑誌連載『福音と世界』が元になっており、その時々における著者の関心が現れているせいでもあるだろう。

本書においては、一つひとつの作品分析の集積が何らかの体系をなしているというわけでもないし、また、学問的に厳密な分析が行われているというわけでもない。むしろ、印象批評的・エッセイ的な文章が多い。だが、それは本書の価値を貶めるものではない。作品の選択の仕方から、本書のオリジナリティが生まれたと言えるであらうし、専門家向けの書籍ではなく、雑誌連載をまとめた一般向け書籍であることを前提とすれば、それは当

然のことでもある。よって、本稿において、その一つひとつの分析を紹介し、コメントする煩は避けたい。むしろ、関心を持った人たちが、実際に本書を手に取り、それぞれの作品の著者の受け取り方に対して、共感を抱いたり違和感を覚えたりしながら、読み進めてもらえればよいのではないかと思う。